

(音 楽 科)

レッスンから表現へ

—他者との関わりの中で育つ自分の音楽探し—

お茶の水女子大学附属小学校

猶 原 和 子

はじめに

1. 教え込む音楽からの脱皮
2. 二つの大きな出会い

I. 新しい試み その1

1. 好きな曲を選び、みんなで歌う
2. 替え歌で広がる交流
3. 中・高学年の演奏からの発見

II. 新しい試み その2

1. 学習計画表にもとづいて
2. 演奏を発表しあう
3. 鑑賞曲も自分達で選ぶ
4. ことばと音楽をむすぶ

III 『学び』のとらえなおし

1. 子ども達のうけとめ・評価
2. 音楽は個人の営み
3. 他者との関わりの中で育つ
4. 『学びの回路』をつくりだす
5. 表現者として育つ

IV. おわりに

## はじめに

### 1. 教え込む音楽からの脱皮

学校で音楽を学ぶことにはどんな意味があるのだろうか？ある時期までの私は、生涯音楽を楽しんでいくために、小学校段階では基礎的な知識と技能を獲得させることが大切だと考えていた。いい教材を見つけよい音楽に出会わせること、子どもを惹きつけるような指導の技術を教師が身につけること。それが音楽嫌いをなくし、子どもの土壌を豊かにすると考えていた。確かに皆で同じ曲に取り組んで美しい響きになった時は心地よく、子どもたちの顔も生き生きしている。そんな表情をみるのが私は嬉しかった。

しかし、どの学年にも教師の期待した反応を示さない子はいる。そういった子が、授業以外の場面で楽しそうに音楽に接するのを見ると、私の中で次第に迷いが生まれた。その子の音楽に対する興味はどこにあるのだろう。年齢的なものや環境・メディアなど、生活背景によっても異なるようだ。ならば、どの子にも同じような反応を望むのではなく、もっと一人ひとりの子どもから出発することが必要ではないのか。

私は不安を持ちながらも、これまでの自分の枠を取り外し新しい授業の形を模索し始めた。

### 2. 二つの大きな出会い

そんな時、フランスのフレネ学校を訪問する機会を得た。そこではセレストン・フレネの教育思想に根ざした、まさに子どもが主体の教育が営まれていた。私は、一人ひとりが自分の計画に基づいて、静かに学習をすすめている姿に驚いた。毎日の子どもの生活は、自由作文などを通して教室に持ち込まれる。そこで自分を表現し交流し合うことが集団の学習へとつながっていた。<sup>\*1</sup> 私は音楽の授業のなかにフレネ技術を生かしたいと思い、まず音を通して自分を語る場をつくることを考え始めた。

もう一つ新しい試みの支えとなったのは、毎年本校の研究会で助言していただいている徳丸吉彦氏の言葉である。氏は「音楽は個人の楽しみであり、個人がどのような音楽にむかっていけるか、その能力を育てるのが音楽教育の重要な役割であろう。」と述べている。また、「どんな音楽でも音は孤立しているものではない」「ある人にとって音は単なる音であると同時にその人が表れたものであり、その人が所属する文化の音でもある」と続けている。<sup>\*2</sup>

音を通して自分を意識し他人の存在を意識していく…そこからコミュニケーションがうまれていく。個を基盤としたそのような活動から出発することが、音を通して他の文化、やがては世界を知ることにつながっていくのだという考えに、私は大きく心を動かされた。そして、自分を表す小さな試みを始めることにした。

## I. 新しい試み その1

### 1. 好きな曲を選び、みんなで歌う

最初に始めたのは、リクエストからスタートする低学年の授業だった。毎回4人ずつ順番に、歌集の中から曲を選び、リクエストする。選ばれた4曲を授業の始めに皆で歌うというものである。本人が知っている曲という条件で始めたが、教師の予想を越えて子どもはこの時間を楽しみにし、レパトリーを広げていった。2年間でリクエストされた曲は約80曲になった。

リクエストを喜ぶ理由は、資料1aのように考えられる。また、人気の高い曲は年度によって少しずつ異なるが、どんな曲が気に入ったかを聞いた結果は変わらず、ほぼ予想したとおり資料1bのような答であった。このほかに、音楽会などで上級生や兄弟の歌を聴いてかっこいいと思ったとか、長いと歌った気がするという理由でリクエストされるものもあった。ひとりひとりのリクエストを聴くと、その子らしさを感じる。自分なりにその曲のよさを言葉でもあらわしていた。

《資料1 a》リクエストを喜ぶ理由として考えられること

- ①自分の選んだ曲を必ず皆と一緒に歌うことができる。
- ②それにより、自分がクラスの一員として位置付いているという実感を持つことができる。
- ③友達の希望する曲を歌うことで、いいなと思う曲がふえ、個人のレパトリーがふえていく。
- ④自分の好きな曲をリクエストするので、教師から与えられた時よりも歌いたい気持ちが強い。

《資料1 b》どんな曲が  
気にいられたか

- ・物語性があり、わかりやすい
- ・メロディーが美しい
- ・リズムが楽しく、乗りやすい
- ・手遊びや振りをつけて歌える
- ・自由に歌詞を付け加えたり変えることができる

それぞれの曲でわからせたいと教師が思うことがある。だがそれは一度に取り上げて教えなくてもいい。むしろその時の状況に応じて曲を深める指摘をしていくことが大切。その曲との何度かの出会の中で曲の持つよさを感じていけばいい。リクエストを続けて、そう考えるようになった。

2. 替え歌で広がる交流

どのクラスでもリクエストされる人気の曲の一つが『友達賛歌』である。子どもたちはすぐに替え歌にしたがる。それを否定せず、どんどん取り入れて発表しあった。有名な替え歌のほかにも次々と替え歌が集まってきた。

ア おはぎがお嫁に行く時は あんこと黄な粉で化粧して 丸いお盆にのせられて 着いた所は応接間	イ おもちがお嫁に行く時は 醤油とおのりで化粧して 四角いお盆にのせられて 着いた所は腹の中	ウ 波に花咲くよつくらは 東北一の漁港にて 海水浴には波立たず 町ははんかなり
---	---	--

これは2年の例である。アが紹介されるとすぐにイのような歌詞が作られた。ウは、「おばあちゃんがお手玉をするときに歌ってたんだって」と実際に港でとれた貝を持ち込み、お手玉を披露してくれた。このように生活の匂いのするものが紹介されると、ほかの子の替え歌も変わってくる。

エ 国語 算数 音楽や 創活 体育もあるけれど 私が一番好きなのは お弁当の 時間	オ 歩くの大好き 原始人 電車が大好き 現代人 ロケット大好き未来人 みんな楽しいね	カ 電話をしようと思ったら テレホンカードがありません いろいろさがして見つかった だけど入れたら 0だった
--	---	---

やがて季節にちなんだ替え歌も作られ、原曲も様々なものから選ばれるようになった。メロディーを借りるこの活動では、自分の言葉で音楽をイメージし楽しむことを大切にしたい。子ども達は、言葉のおかしさや声にしたときのおもしろさを楽しみ、喜んでいた。発表される替え歌には子ども達の生きている現実が写し出される。内容はともあれ、社会のニュースや流行はすぐに替え歌にされる。

キ 『じゅけん』『静かなこはん』のかえうた 私とじゅけんは関係ないのよ 小学2年にゃ 関係ない そんなもの 関係ない 大学じゅけんは大変だけど 小学じゅけんはかんたんだ 後略	ク ラップの曲の一部 その人結婚してから、 旅行いったら楽しい オーイエーイ オーイエーイ その人おとなになってから 赤ちゃん生まれてパフパフ
--	--

また、担任の先生の特徴をとらえた替え歌も人気があり、学級の愛唱歌になったものもある。歌いやすいためには、言葉のリズムや響きとあうことが大事だと気付く子どももでてきた。交流を深める中で、さらに工夫した新しい替え歌に生まれ変わるものもあった。

### 3. 中・高学年の演奏からの発見

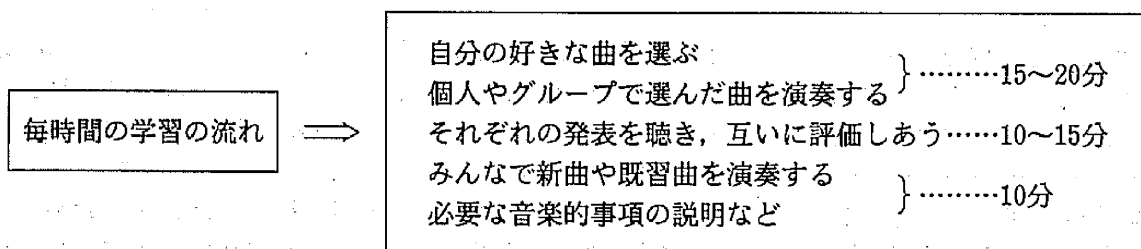
私は次第に新しい試みを上の学年に広げていった。「リコーダーで好きな曲を発表しよう」「自分の好きな曲をみんなに紹介しよう」「ミニミニコンサートをしよう」。このような提案は喜んで受けとめられ、子ども達は積極的に取り組んだ。しかし、改めて気づいたのは、子どもの感じ方は多様で、学ぶテンポも興味の入り口も異なるということだった。プロダクトではなくプロセスを大切にするなら、音楽をつくりだす経過を同じ枠や時間で切り取って求めるのでは不十分だ。私はさらに発想を転換し、個の学びを中心に据えた日常的な学習の場を考えるようになった。

## Ⅱ. 新しい試み その2

### 1. 学習計画表にもとづいて

これまでの手応えをもとに、さらに一步踏み込んだ新しい学習の形をすすめていったのが本研究である。94年度5年生103名（男子52名 女子51名）を対象とした。個人の興味・関心に基づいた音楽を学習の中心におき、個の学びを追及すること。それが、集団としての高まりとどうつながるのかをみていくことがねらいである。対象の学年は1年から私が音楽を担当しており、今回の学習による変容がつかみやすいと考え選んだ。研究対象期間は1年であるが、今年度も引き続いて実践を継続している。なお、研究期間中4年生106名に対しても同じ形で学習をすすめ、比較の対象とした。

1単位40分の学習は、毎時間おおよそ次のようにすすんだ。



子ども達はミュージックプラン（学習計画表）にしたがって、自分の学習を進めていった。

ミュージックプランはフレネ学校の仕事の計画表(Le plan de travail)にあたるもので、「計画・予定表、進行記録票、成績、通知表、その他すべてを兼ね備えしかもそれ以上のもの」である。<sup>\*)</sup>

ここでは週2回の音楽の時間に見通しを持って学習していくために、毎月の表とした。

取り組む内容の大きな枠は教師がまず提案し、子どもの学習の実態に沿って、話し合いながら変更することとした。毎月の学習時間は予め記入しておき、個人で計画をたてやすいようにした。実践が進むにつれ、子ども達は演奏の内容や形態などを工夫し、時間をかけてじっくりと取り組むようになった。それに従い、プランも一か月から二か月単位へと伸びていった。

〈ミュージックプランの内容〉

**ミュージックプラン** 6月

5年3組 M子

1. 音をよく聞いて演奏しよう

6月の授業日

2 (木)	7 (火)
9 (木)	14 (火)
16 (木)	21 (火)
23 (木)	28 (火)
30 (木)	

3. 私のすすめる曲

2. ソルフェージュ (リズムや楽譜を読む)

自分の感想

友達の感想

4月の発表しよう (下に音の評価を記入)

世界中の歌が 5. (木) 4. (木) リコーダー

今月の、じゅん全部出来たよ。この、じゅんのリコーダーが中心にふちふちになる。今回、自分の好きなリコーダーの世界の歌をみんなの前で演奏してみたい。

むすかしいのちびくちうせんしているね

私本美子

《資料2》毎月のミュージックプラン

A 歌やリコーダー、器楽の演奏発表

曲目や形態は自由。器楽は4月のみリコーダーに限定し、以後は自由とした。

B ソルフェージュほか

これまで学習してきたリズムや音程、音楽用語を確認するもの。カードを中心に用意しておき、必要だと思うカードを各自が選んで学習する形をとった。

C 鑑賞曲の発表

自分で気に入った曲を選び、みんなに紹介する。曲目は教科書の鑑賞教材にとどまらず生活の中で耳にしたお気に入りの曲とした。

CD、テープ 生演奏など。

A・Bは友達や教師に聴いてもらい、OKが

できれば日付を記入しその部分をきれいに塗る。月に1回はクラス全体の前で発表することを提案し、その発表については全員が5段階で評価することにした。Cの鑑賞曲については各自のカードを用意し、評価と感想を残すことにした。

2. 演奏を発表しよう

(1) やりたいことを選ぶ

ファミコンの曲、流行の歌、既習曲、教室に置かれている多くの歌やリコーダーの本・カード。一人ひとりがそれぞれの立場で曲を選び始めた。すぐにいきいきと始めた子もいれば何をしたらいいか戸惑う子もいる。リコーダーが好きな子の中には、これまで歌ってきた曲を次々に演奏するものやTVアニメの主題歌に絞って発表する子が現われた。高度な指使いが必要とされる曲にも関わらず、発表後は「ぜひあの曲をやりたい」と思う子どもが次々と発表した子の周りに集まり、教えてもらう姿が見られた。また、普段は真面目一方に見える女の子が実は流行の先端をいく歌が大好きで、男子の全く知らない横文字の並ぶ曲を2、3人で歌い、聴き手を圧倒させる場面もでてきた。

(2) 初めて音と技術がつながる

良太は読譜やリコーダーが大の苦手である。忘れ物を繰り返す、友達と喧嘩をしては外に飛び出していた。5年になっても友達の演奏を聴いたりぼんやりと考えている風だったが、ようやく5月になって、「これ、吹けるかな？」と教科書の鑑賞教材として小さく載っている『花』を指さして聞きにきた。「お母さんがね、知ってるって歌ってくれた。いい曲だと思ったけれど僕にも吹けると思う？」

彼が自分からやりたいといったのは初めてである。彼にとって簡単とはいえないが、その気持ちを大切に、私と一緒に始めた。階名は苦手なので、私を手伝って書いてあげると、「これはこういう指だったよね」と一つ一つ確認し、自分で指番号を書き加えていった。まじめに取り組む様子を見て「すごいぞ、良太、いっしょにやるか」と隣で応援する子もでてきた。友達と対等な関係が作りにくい彼はこのことをとても喜んだ。自分のテンポで少しずつできるところがふえ、7月になってとうとう皆の前で発表した。この曲を選んだのはただ一人。たどたどしいけれども最後まで演奏した良太に対し、皆の評価は3と4が半々であった。黙々と練習を重ね、自分なり

に音楽として表そうとしたことに対する評価であったと思う。彼はやっと人前で演奏する心地よさを感じたようで、次に皆で歌ったことのある「歌は僕らの友達」を選んだ。自分自身に確かめるようにしながらゆっくり練習していた。

良太にとって、教師の指を真似して何とかみんなと同じようにこなしてきた曲は、その場限りのものだったに違いない。自分で選んだ曲をじっくり自分のペースで学んでいくことで、初めて彼の中の音楽と技術はつながったのである。

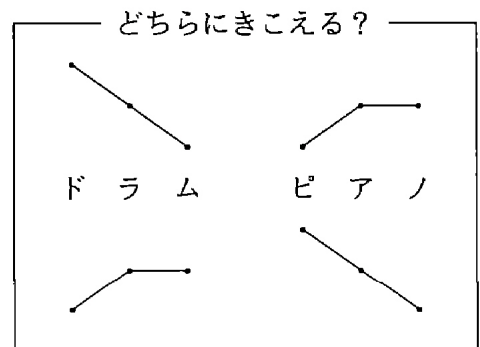
(3) 自分にこだわり、発表を喜び始める

月に1回はみんなの前で発表しよう。ほかは教師や仲間に聴かせるのもよい。この約束でスタートしたが、子ども達は圧倒的にクラス全員に向けての発表を好んだ。自分の好きな音楽を友達にも伝えたい、共有したいという欲求が素直に現われたのだろう。どんな演奏もきちんとしてとめてもらえるとなると、発表も変化してきた。

歌やリコーダーばかりでなく、ピアノやヴァイオリンを楽しそうに演奏する子もふえた。普段目立たない子や技能が相対的にみると未熟かなと思うような子が堂々と発表するようになった。これは、それまでの授業の中ではみられなかったことである。たとえ評価が3でも友達に自分の存在、隠れていた部分を知ってもらえたことが嬉しいといった感じだ。次第に発表はそれぞれの個性が感じられるものになっていった。

(4) 身近な生活から音楽をみつける

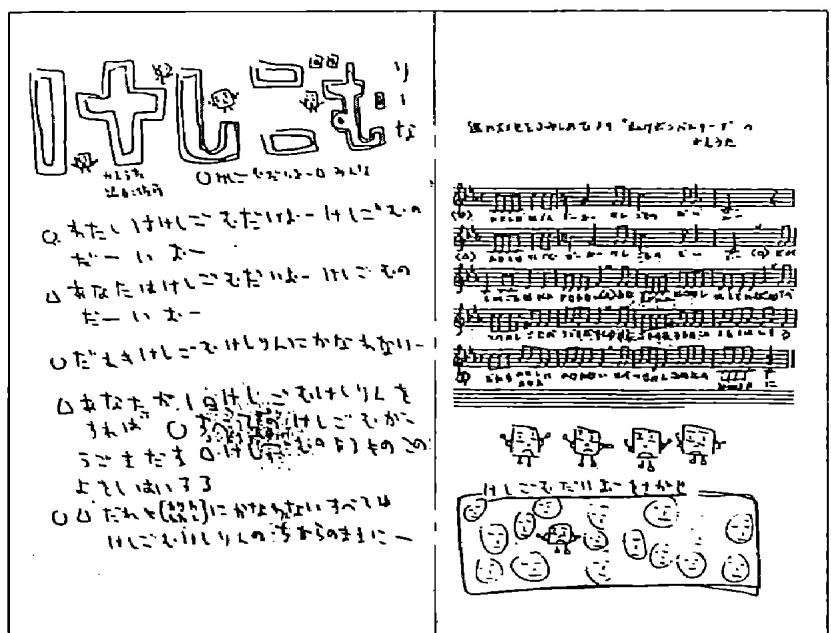
智之達は身近なところから思いついた音楽を次々に発表した。「アフリカ民族の歌」という作品は、アルトのマウスピースを用いた合奏にコンガと声を加えたものである。即興的な音楽づくりを楽しんだ彼等は、次にリコーダーで音楽室の楽器の名を吹き、そのリズムと音の抑揚で名前を当てるというゲームを考え出した。パート3まで続くと、聴き手からも「そのリズム違うよ」「ドラムとピアノの違いは？」と反論もでてみんなできたと音をとらえなおす場面もうまれた。



また、作品は音楽の枠をこえたところからもうまれる。

本校では研究開発の指定を受け、各教科のほかに自分の好きなことを追及して学習する『自主学习』の時間を設けている。智之はその時間、大好きなマンガを描き続けていた。作品は何巻にもおよび、多くの読者を持っていた。

ある日、彼はそのマンガの主題歌をつくることを思いついた。さっそく、白板に主人公の『エンピツ君』を描き、その前で自作の歌を歌った。これは好評で、すぐに読者である仲間も加わって、敵のキャラクター『けしゴム大王』をうたった2番が共同で作られた。どちらも唱歌の域を出ない自然な曲だ。次々と登



《資料3》自分達の本

場するキャラクターの歌が発表されるにつれ、「もっと抑揚をつけたら」「メロディーをはっきりとわかりやすい言葉で」といった助言が友達からでてきた。智之達はあれこれ考え試した末に、替え歌の形で発表した。そしてそれらの曲をまとめて、やがて一冊の本にした。(資料3)

女子からは「掃除時間につくった歌」が発表された。ほうきを持って踊りながら、自作の曲を演奏したものだ。さらには衣装まで持ち込んで照明を落として自分達の発表を楽しんで聴いてもらおうという聴衆を意識した発表も始まった。

選曲や演奏の技術を4年と5年で比較してみると、アルトリコーダーを5年で用いていること以外は、特に大きな違いを感じない。あくまでも、個人の好みや技術に基づくように思えた。TVや社会の流行、音楽会で生の音を聴いて、あるいは学校やおけいこで知った曲に触発されて、一人ひとりが演奏に向かっていた。

発表が進むにつれて、お囃子、替え歌、創作や劇、踊りと多様な様式で、楽器もベルや鍵盤楽器、木琴、トーンチャイム、和太鼓などを用い、いろいろ組み合わせるようになっていった。

### 3. 鑑賞曲も自分達で選ぶ

#### (1) こどもの生活がみえてくる

自分の気に入った曲をCDやテープでみんなに紹介しようという提案は、すんなりと子どもに受け入れてもらえた。特に、何を演奏しようか迷ったり友達との関係がぎくしゃくしているような子にとっては、鑑賞曲が自分らしさを表す第一歩であった。このようにして持ち込まれた曲からは、一斉授業の時には教師にも子ども同士にも見えにくかった生活がみえてきた。

音楽は別世界とばかりの態度だった綾瀬は、休日は一日中クラシックを聴き放しという父親の音楽に耳を傾けた。「今までうるさい!」と思ってたけれど、その気で聴くと結構いいと思った。」と言いチゴイネルワイゼンを持ってきた。兄や姉から流行の曲を仕入れ、自慢げに発表する子や、親が車の中で好んでかける曲に耳を傾ける子どもでできた。

#### (2) お互いに楽しんで聴く

子ども達は実によく聴きながら、カードに自分の一言を書き入れていた。感想を見ると人それぞれで、書き方も一様でない。

A子にはカッコイイ曲が、B男では音の響きが気に入らないとある。しかし多様なジャンルの曲を数多く聴く中で、選んだ子らしさを感じ、世の中にはいろいろな音楽があるのだと実感したようである。また、感想を交流しあって、人の好みもまた様々なことをわかっていった。

いわゆる鑑賞教材を教師が与えるのと違い、発表者も鑑賞者も意欲的で楽しみなコーナーとなった。

#### (3) 生活の広がり音楽にあらわれる

4年生では比較的にみんなが知っている曲が多かったのに対し、5年生になると持ち込まれる曲の幅が広がっていった。子どもの生活スタイルが一樣でなくなる時期なのでもあろう。TVや映画を見て流行の曲に夢中な子もいれば、ゲーム音楽やクラシック一筋の子もいる。受験勉強が忙しく、たまにラジオを聞く程度の男子もいる。持ち寄られた曲は、お互いに知らないことも多く、好みが違うといいながらも新鮮に受

#### 《資料4》音楽鑑賞カード

5年2組I子

日	曲名	作曲者	感想
	エ・ソレリ	ソレリ	◎ エ・ソレリはみんなが知っている曲で、リズムが楽しい。
	Sayonaraは	PERSONZ	○ Sayonaraはみんなが知っている曲で、リズムが楽しい。
	歌の翼にのせて	マシエル・ブー	◎ 歌の翼にのせてはみんなが知っている曲で、リズムが楽しい。
	果てない夢を	出口 雅之	◎ 果てない夢をはみんなが知っている曲で、リズムが楽しい。
	負けな	織田 哲郎	◎ 負けなはみんなが知っている曲で、リズムが楽しい。
	世界が終わるまでは...	織田 哲郎	◎ 世界が終わるまでは...はみんなが知っている曲で、リズムが楽しい。
	U.K Passenger	小室 哲哉	○ U.K Passengerはみんなが知っている曲で、リズムが楽しい。
	任天狗	カーペンターズ	◎ 任天狗はみんなが知っている曲で、リズムが楽しい。
	アヒル	ドビュシー	◎ アヒルはみんなが知っている曲で、リズムが楽しい。
	YAH YAH YAH	飛鳥 涼	○ YAH YAH YAHはみんなが知っている曲で、リズムが楽しい。
	カントリー・ガール	チャーパー	◎ カントリー・ガールはみんなが知っている曲で、リズムが楽しい。
	ドラゴンクエストVの魔王	松山 圭一郎	◎ ドラゴンクエストVの魔王はみんなが知っている曲で、リズムが楽しい。
	パール・キーン	クリュー	◎ パール・キーンはみんなが知っている曲で、リズムが楽しい。
	ルージュの伝言	荻井 由実	◎ ルージュの伝言はみんなが知っている曲で、リズムが楽しい。
	グレイス	パッパ	◎ グレイスはみんなが知っている曲で、リズムが楽しい。
	トルコ行進曲	モーツァルト	◎ トルコ行進曲はみんなが知っている曲で、リズムが楽しい。
	アングラ	パカニニ	○ アングラはみんなが知っている曲で、リズムが楽しい。
	ザルテラの虎さん歌	ザルテラ虎さん隊	○ ザルテラの虎さん歌はみんなが知っている曲で、リズムが楽しい。

けておいた。

また、選んだ理由としては、曲のリズムやメロディーといった音楽的な指摘ばかりでなく、「作曲者が好き」「映画やTVを見て」「歌っている人が好き」といった答がかえってきた。さらに、持ち込まれたCDやテープの演奏は、オリジナルな形ばかりでなく、アニメの歌のオーケストラバージョンとか交響曲をハンドベルで演奏したものなど様々であった。

5年の子どもの選んだ曲を大きく分けると、資料5のようにくることができる。

《資料5》鑑賞曲の分類 (94年度3クラスの合計なので重複する曲も含む)

クラシック…独奏曲（ピアノ・ヴァイオリン・フルート）交響曲 歌曲 バレー組曲など	41曲
TVや映画の主題歌など、CM曲	45曲
TVや映画の曲（アニメ作品）	23曲
ゲーム音楽（ドラゴンクエスト、ファイナルファンタジーのシリーズなど）	20曲
外国のポップス（ビートルズ、カーペンターズ、シュガーの曲など）	8曲
スポーツの応援曲（サッカー・野球）	4曲
ミュージカルの曲（「アニー」「キャッツ」など）	2曲
そのほか（ラップ・日本の流行曲など）	10曲

#### (4) 演奏と鑑賞がつながる

アーティストとして挙げたのは、植松伸夫、チャゲ&飛鳥、ベートーヴェン、チャイコフスキー、アランメンケン、松任谷由美、米米クラブなどであった。

自分では知らなかったけれど、鑑賞曲として聴いて気に入って、演奏・発表する子どもでできた。また、この鑑賞コーナーを続けていって、実際の演奏の発表を鑑賞する時にも、『聴く』という行為が主体的になり、自分の耳で自分なりの受け止め方をする力が育ってきたように思う。

#### 4. ことばと音楽をむすぶ。

子ども達は、個々の音楽体験を生かして、次第に新しい音の世界をつくりだしていった。なかでもお話や劇と結び付けた発表は多かった。そこにおける『ことば』の持つ役割は大きい。そこで、3学期は国語と合同で「詩と音楽を合わせよう」という課題学習を特別に設けた。進め方や助言の方向は、国語の担任である成田教諭とともに話し合っていた。

まず子どもは自分の好きな詩を選び朗読した。朗読自体がとても音楽的活な活動である。自分の朗読をテープに録音して聞き直したり友達と発表しあった後、音楽と合わせてみたい詩をもう一度選んだ。たくさんの中から次の詩が選ばれ、選んだ詩によるグループに分かれて活動を始めた。

《資料6》子ども達の選んだ詩

詩の題名 ( )は選んだグループ数	作者	詩の題名	作者	詩の題名	作者
のろすけむかで	工藤 直子	希望	小島 禄琅	さあ出発(2)	阪田 寛夫
ちびへび(2)	工藤 直子	まん月	佐藤 義美	0チャンネル	新川 和江
パリにいきたいクジラ	工藤 直子	秋の日和	まきたかし	野ねずみの歌	友田多喜雄
夕陽の中を走るライオン	工藤 直子	ねむれ牛蛙	佐藤 恭子	ロバちょっとすねた	小黒 恵子
うわさばなし(2)	工藤 直子	とかげ	原田 直友	ロバと少年	小黒 恵子
十人のニグロのこども	マザー・グース			ぼくはイルカになって	大州 秋登

朗読が進んできた段階で、イメージする音楽・音探しを始めた。詩に対する思いが様々なように、音のイメージも多様だ。50曲を越えるCDを聴きながら頭を寄せるグループもあれば、打楽器を組み



合わせて鳴らしている中で偶然できたリズムのおもしろさから出発したところもあった。まずは既習曲から音探しを始めるグループも多かった。朗読者も一人であったり声の違いを生かして複数のところと、全体のイメージがまとまるにつれてそれぞれの作品に個性が現れてきた。

この学習のねらいは、詩の内容や言葉・響きと既成の或いは創作の音楽や音を関連づけて新しい音の世界を自分なりに持つことだった。できあがった作品を楽譜に表すと次のようになる。〈譜例〉

活動を振り返ると、子ども達が言葉の響きや内容に触発されて、音楽を聴いたり演奏しようとしている姿はとても主体的であった。教師からみると、この表現でいいのかと首をかしげる場面も起きる。けれども、満足そうに合わせて楽しんだり、イメージが異なってお互いの音楽を主張しあっている姿を見ると、このような経験の積み重ねこそが大切なのだと思った。一人ひとりがこのような経験を積み重ねることで、感性を研ぎ澄ませていくのである。言い換えると、単に切り離された演奏ではなく、生活の一部に音楽文化を位置付けていった。

譜例1 「うわさばなし」 男子2 女子2 (Mは音楽, A~Dは朗読者)

譜例2 「うわさばなし」 女子3 男子3

同じ詩をもとにした作品であるが、譜例1の場合は全体を一つの音楽でまとめている。口笛やひそひそ声などはその場を効果的に表している。譜例2の場合は、一人一人がむぎになったつもりで自分のリズムをつくっている。いろんな主張を持った麦(音)が重なり、ワイワイ話したり、ひそひそ話したりを表現しようとしている。



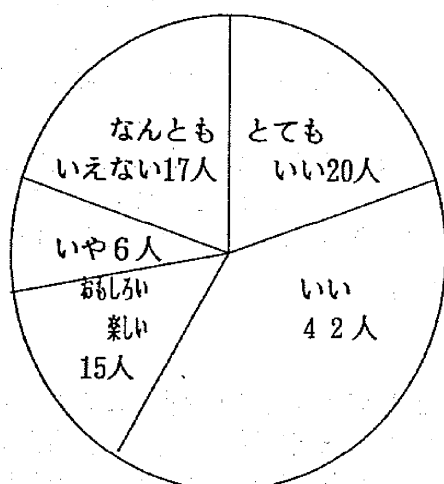
### Ⅲ. 『学び』のとらえなおし

#### 1. 子ども達のうけとめ・評価

実践の途中で子ども達に取ったアンケートでは、次のような声が聞こえた。

(94年7月12日実施 5年生男子50人 女子50人)

##### (1) このようなやりかたについて



##### (2) よかったところ (複数回答)

好きな曲を演奏できる	23人
自分で好きに進められる	16人
好きな人とできる	8人
発表ができる	15人
評価が聞ける	5人
鑑賞ができる	28人
計画が立てられる	14人

##### (3) 大変・いやだったこと (複数回答)

時間が短い	29人
プランをかくのが面倒	7人
鑑賞曲を選ぶ	12人
みんなの前での発表	3人
みんなで演奏する時間が少ない	4人

アンケートの結果でわかるように、8割近い子どもがこのような学習を支持した。「好きな曲を」「好きなやり方で演奏し」「みんなに聴いてもらえる」ことが主な理由である。友達に発表の評価をしてもらうことが楽しみと答えた子もいた。一方、いやだと答えた子は全員でいっしょに歌う時間が少なくなったことを挙げていた。クラスがひとつになって歌ったり合奏したりするときのような感動が欲しいという意見であった。毎年行う音楽会の時期を中心に、皆と一緒に演奏する機会も大切に、バランスを考えていくことにした。4年生では5年以上にこの学習の形が支持されたが、どちらでも問題になったのが、時間の不足であった。慣れるにしたがい、子ども達はじっくり時間をかけて考え内容を高め、よりいいものを自分なりに表そうとするようになった。しかし、40分という一単位時間はあまりに短い。「鑑賞は隔週にする」「発表者を制限する」など、様々な意見が子どもからも出された。話し合いながら、ミュージックプランの内容や期間を変更していった。

#### 2. 音楽は個人の営み

音を楽しむのはまさしく個人の営みである。そんな個人の楽しみを大切に、どのように発展させていくかを見守った実践であった。子ども達はたくさんの発表を聴く中で、自分に好きな音楽があるように友達にも大切な音楽があることを知った。ときにはその子にとって理解できない、気にいらぬ曲も発表される。それをありのまま教師が受けとめることが重要である。次の例で考えたい。

寛夫という男の子は、人と一緒に演奏するのが嫌い、準備室にはいつても鍵をかけていた。私は最初、みんなと向き合うのを避け学習から逃がっているのだと思っていた。しかし、話したり様子を見るうちにそうではないことがわかってきた。低学年のころから音に対して非常に鋭く、自分の好みをはっきり持っていた彼は、自分の思いと違った歌われ方や、リズム中心でメロディーのわかりにくい曲に耐えられない。みんなが練習する空間は「気持ち悪くなる音がいっぱい」だから自分だけの音の世界に入る。鑑賞は「鳥肌が立つほど許せない曲が多い」から耳をふさぐ。勝手にわがままに思えるが、寛夫の中では当然の要求なのだ。

そんな彼は音楽会で聴いた「怪獣のバラード」を気に入り、リコーダーで再現しようとした。しかし曲は長いし音域は広くて覚えきれない。そこで私に階名を聞き、いっしょに口ずさみながら自分に

わかる独自の楽譜を作り出していった。音楽を欲していないのではなく、自分の音探しをしていたのである。発表後共感した友達が寛夫のまわりに集まった。彼は納得するまで妥協しないが一緒に演奏するのを楽しんでいた。そしてあくまで自分の好みを主張しながらも、他人の音楽に対して少しずつ耳をひらくようになっていった。寛夫を教師の音楽の枠の中に押し込んでいたら外にでてこなかった世界である。

徳丸吉彦氏は、「自分はこれがいやだと言えること、嫌いな音楽を強制されないことが大切だ」という。<sup>\*2</sup> これまでの音楽の政治的、社会的扱われ方を思いおこすとうなづける。当たり前のことだが教育現場では、ついおろそかにされてはいないだろうか？

その上でひとりひとりを尊重するということは、やがて、さまざまな民族の文化に触れた時も排他的にならず、認めあう姿勢につながる。違いを知り、お互いを認めあうことが少しでもできるようになったことは大きい。「世界の中の少数派の音楽も生き残れるように、どんな音楽様式も大切にされるべき」であり、今回の試みから、そこにつながる手応えを私は感じた。

### 3. 他者との関わりの中で育つ

1年間取り組んだ過程を振り返ると、子どものひとつの作品に向かう姿勢が変化したことに気付く。最初は単に前に出て発表することを喜んでいて、やがて聴き手の反応を受け止め、次の発表にいかそうとするようになった。それまでの友達の発表で感じたものや自分に対する助言を自分自身に問い直し、悩んだり考え込んだりしながら次の表現をうみだす。音楽は個人の営みであると同時に、個人は文化的・社会的営みの中に生きており、その文脈のなかで音を世界と関連づけている。自分の選んだ音楽を人に聴かせたい、人のことも知りたいというときに、それは他者を意識する場となりコミュニケーションがうまれる。自分の好きな音楽を通して、自分自身をクラスの仲間である他者に表現し、仲間と共有してつながりを深め、交流しあう中で新たな次への課題をみつけた。こうして友達や教師という他者との関わりの中で、個人の音響世界を拡大していったのである。

実践を続けて強く感じたのは、一人で学ぶのではないということである。その子にとって学級が安心できる他者（仲間・集団）と思えたときに初めて外に向かった表現が始まる。一人ひとりの発表を尊重し受けとめるようになって、学級集団は互いの交流を深め次にすすんでいく『学びの共同体』になっていった。

### 4. 『学びの回路』をつくりだす

では、『学び』をどうとらえればいいのか。私は、特定の知識や技能を獲得することとしてではなく、現実に生きている今の生活に根差し人や物と関わる中で自分を知り、興味や関心に基づいてさらに新しい自分像を求めていくという回路を考えたい。今の社会や文化の中で未来にむかって開かれた営みとしてとらえることが大切であろう。

今回の実践では、学習の内容・方法の選択権は子どもにある。一人ひとりの興味や関心・必要に応じて学習していったのだから、当然学んだことも異なる。しかし、2・3でも述べたよう個の学びを進めていくためには他者との関わりが重要であった。『学びの回路』という言葉で表すなら、個別を基本において共同化をめざすということだ。本実践に則してのべると次の二つである。

一つは一人ひとりが演奏を発表し、批評を受け、集団で交流しあうなかで触発され刺激を受けて新たな自分の演奏に向かっていくという回路。もう一つは、個人の演奏が単に発表するだけにとどまらない。友達とともに響きあい内容を組み立てて作品化していくことで、集団の学び・文化をつくりだし、それが集団に還元されていくという回路である。このような回路を音楽の授業でもっと意識して創りだすことが今後重要である。

「怪獣のバード」寛夫の楽譜

$\gamma\psi\theta - \theta^{x^2}$     $\theta\psi\theta\theta$     $\theta\psi\theta - \theta$     $\gamma\psi\psi$   
 31-2  $2^{-1}$  -2522 -352  $-2^{-1}$  1211

$\gamma\psi\theta$     $\theta$     $\theta\psi\theta\theta$     $\theta\psi\theta$     $\theta$     $\gamma\psi\psi$   
 31-2  $2^{-1}$ -2522 -352  $2^{-1}$  1233後半略

〈ヴァイオリンからイメージ〉

5. 表現者として育つ

たくさん作品の発表を通して私が気付いたのは、子ども達の表現は絶えず変化しているということである。評価が高かったからといって同じことを繰り返してはしない。1年以上に渡って変容をみていくと、どんなに気に入った学習材も発表の様式でも同じところにとどまらず、次の出会いを求めていくのだ。ある時には独立した音楽作品としてあるときには映像や動きとともに、子どもは今感じている自分を表現していた。独自の作曲、編曲もあれば、私や他の演奏をそっくり真似することから始めて自分らしい演奏となったものもある。発表がパターン化し飽きるということは起きなかった。

3で述べた『学びの回路』を、三善 晃氏は個人の表現としてとらえ、『自分自身を貫く円環運動』と述べている。\*。ここでの表現は「内から外への『表出としての表現』だけでなく、その『表出』を様式において統制し外から内へと回帰させる『表象=再現』としての表現」である。私たちは、子どもが外に向かって表すときだけでなく、自分の内側で悩み考え、ためている表現も大切に见守らなければならない。

表現するということは、生きるということである。私は今回、子ども達が音楽を窓口に関わり人と社会と関わって、自分らしく生きる、表現者として育っていく過程がわかってきた気がしている。

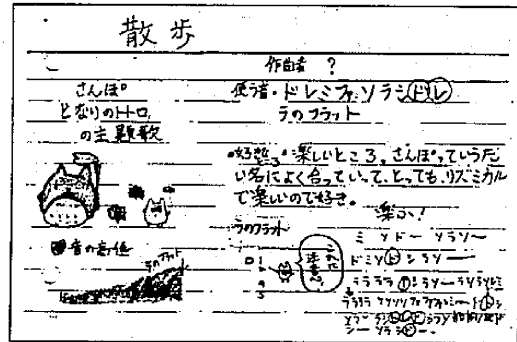
IV. おわりに

この実践を行って、子どもからはぜひこの形で続けてほしいという声が高い。私も新しい発見がいくつもあつたこの形でもう少し研究を続け、独自の『音楽物語』を子どもとともに積み重ねていきたいと思う。このような学習をすすめていくための今後の課題は以下の通りである。

(1) 学習材をふやす

できるだけ子ども達の学んだものを作品化し、学習材として共有の財産をふやすこと。

現在はリコーダーのおすすめカードや、和楽器・替え歌、劇の本などが作られている。音のライブラリーやソルフェージュのカードは少しづつふえている。参考になる楽譜やCDももっと整える必要がある。



《リコーダーのおすすめカード 4年》

(2) 学習環境を整える

個人の学びをすすめるために、音響機器の充実は欠かせない。現在ラジカセ6台、テープレコーダー12台は自由に持ち出しできる。また個人の演奏空間を保證できるようにヘッドフォンを使える電子楽器も多く使用している。コンピューターと関わる部分も、学習財とからんで今後は必要になるだろう。必要な情報をひきだせることも望まれる。

演奏活動の場所は屋上や空いている教室を利用しているが、やはり音の問題は悩みである。40人が一度に勝手に音をだすという場面を避けるとともに、個々に活動できる空間を考えて行きたい。

(3) 異学年間の交流をふやす

これまで異学年の交流というと、音楽会や行事を通してが多かった。現在は少し進めて、学校の皆に発表したいという要求があると、休み時間を使ってミニ音楽会を開いている。行なう度に盛況で低学年から高学年まで喜んで集まる。聴き手も演奏者も楽しい刺激を受けているようである。音楽室はオープンにしているので、好きな楽器を愛好する仲間が集まり学年を越えて演奏している。和太鼓の音が聞こえると、自然に高学年がやってきて低学年に教えている。できればもっと日常的な交流を深めたい。

#### (4) 本物に触れる場をふやす

一人の子が興味をもっている音世界を探ると、同じような音世界を楽しむ人々があり、いきいきと文化が営まれていることを知る。このような文化に触れると、子どもの学び（音楽的文化実践）は飛躍的に進む。教師は、自分の音楽世界に子どもをあてはめるのではなく、こうした文化（本物）に子どもをであわせていくことをもっと考えるべきである。

子ども達に、音楽会などで私が持ち込む音楽についてどう思うか、実践の途中で尋ねたことがある。すると、どのクラスでもぜひ紹介してほしいという声が返ってきた。「先生の持っている音の世界は私達が知らない部分だから」「どんどん紹介して、でも好きになるかどうかは別。選ぶのは僕たちだよ！」。更に慣れて来ると、「ミュージックプランの発表の枠を広げようよ。他はジャンルで分けないう方がいい。」「私達を信用して任せて。内容はちゃんと考えられるから」といった声がおきた。私はこれらの声を聞いてとても嬉しく思った。

教師も子どもたちとともに、共同体の一人として文化の発信者となろう。そう考えている。

#### 引用文献と記述についての説明

- \* 1 フレネ学校は南フランスのニースから車で4、50分入ったヴァンス市の郊外にある。セレストン・フレネの教育思想に根差した実験学校。現在は公立学校となっている。詳しいことは、フレネへの道「生活に向かって学校を開く」 若狭蔵之助 青木書店 1994
- \* 2 この中で引用させていただいた徳丸吉彦氏の言葉は、90～95年に本校で行った「教育実際指導研究会・音楽部会」での助言の記録にもとづく。
- \* 3 I章での実践内容は 90～93年に「教育実際指導研究会」発表要項に載せた猶原の実践報告をもとに加筆したものである。
- \* 4 この学習は、普段の発表も認めながら、国語と連動して行った。時間としては国語約10時間・音楽15時間で行い、それぞれの作品を録音し、全クラスで評価した。評価の高かった作品は、お昼の放送に流して全学年に発表した。
- \* 5 シリーズ学びと文化⑤「表現者として育つ」 佐伯 胖、藤田英典、佐藤 学編

#### 参考文献

- (1) 岩波講座「日本の音楽・アジアの音楽」I, II, VI  
徳丸吉彦, 平野健次ほか編 岩波書店 1988年
- (2) 「民族音楽学」 徳丸吉彦 放送大学教育振興会 1990年
- (3) 「学校の再生をめざして」2 佐伯 胖, 汐見稔彦, 佐藤学編 東京大学出版会 1992年
- (4) 「学ぶ」ということの意味 佐伯 胖 岩波書店 1995年
- (5) シリーズ学びと文化①「学びへの誘い」 佐伯 胖, 藤田英典, 佐藤 学編  
東京大学出版会 1995年